



アジアと日本、  
都市に住むことの未来は

ゲスト／毎日新聞大阪本社社会学芸部副部長  
池田知隆

## アジアのアーバンライフ

山藤 池田さんは新聞社にお勤めですから、いろいろと世界を見てこられたと思いますが、アジアの都市で、これは面白いと思われたのはどこですか。

池田 僕が好きなのは、ベトナムのホーチミンやタイのバンコクですね。長い歴史と伝統の重みが残っているでしょう。特にホーチミンは、独自の伝統に加えて中国文化やフランス文化が入っていますから。そういった歴史の厚みが街角で感じられます。

山藤 私はホーチミンに行ったとき、ああこれは戦後すぐの日本だと思いました。電気製品などを山積みして売っていたり、まさに闇市なのです。ちょうど日本の復興期の活気を感じました。

池田 昭和二十年代から三十年代にかけての日本ですね。

山藤 ええ。それにバイクが、けたたましい音をたてて走り回っています。これが自動車に変わったら、いったいどうなるのかも思いましたが。

池田 そうなってしまったのがバンコクですね。渋滞がひどくて動けない状態です。

もののね。それに大気汚染が進んでいるでしょう。子供たちに大きな影響があるんじゃないかと心配なんです。

山藤 そうですね。私にも経験があります。バンコクで会議がありまして、ちょっと疲れたから外に出てみたのです。ところが十分も歩いたら窒息しそうになって（笑）。

池田 そういう流れは避けられないものなんでしょうね。

山藤 とにかく都市化していくスピードが速すぎる気がします。日本の高度成長は速かったと言われますが、それなりにインフラを整備する余裕はあったと思います。しかし、今アジア全体を見ても、経済力をつけることが最優先になってしまつて、混乱が起きてみても解決は先延ばしに、というように見えますね。

池田 日本の場合は、江戸時代からの各地それぞれの政治社会システムがあったからじゃないですか。その上に乗った形で少しずつ動いてきたから、それほど混乱も起きなかつたのだと思います。

山藤 なるほど。そうかも知れませんが、ただアジア全般に言えることは、都市の数がそれほど多くないから、ひとつの大都市に集中してしまっているわけで、バン

コクはその典型じゃないでしょうか。

池田 世界的に見ても、大都市に人が集まってくる傾向が見られますね。地元の仕事がないから、大都市に行けば何とかなるだろう、ということですね。実際バンコクなどでも、あの空気に色がついているような大渋滞の中で、新聞を売っています。それでもどうにか暮らしていけるわけでしょう。インドネシアなどは島がたくさんあって、農村と都市の関係がまだ保たれていると思いますが。

山藤 日本でも一極集中が言われていますね。

池田 マンハッタン化と言いますか、高層ビルがどんどん建っていったら、東京に何もかもが集められたわけです。アジアではシンガポールが同じような感じですね。ただ日本では、大阪がかうじて踏ん張っているんじゃないでしょうか。僕は新世界が好きでして、「じゃりん子チエ」で描かれているような時代離れた雰囲気があるでしょう（笑）。

山藤 ああ、そう言えばバンコクでもホーチミンでも香港でも、ああいう雰囲気ですね。屋台で庶民が騒がしく食事をしたりしています。

池田 近代的に見えるシンガポールでも、やはり庶民は屋台が好きなんじゃないで

しょうか。いくら高層ビルが立ち並んでも、庶民の暮らしは、また別物という気がしますね。

山藤 ある意味では、スラムではないですが、猥雑さが都市には必要なのかも知れませんがね。

池田 ですから地域ごとの都市化が単一であってはならないと思うんです。シンガポールなどは、確かに環境にやさしくて合理的なんですが、中心街を歩いていると、何かファストフードショップにいるみたいで（笑）。

山藤 あそこはきっちりとした計画で進められてきましたが、最近一部修正して、古い町並みも残しておこう、ということになったようです。しかし若い人たちにとっては、どうなのでしょうか。

池田 日本の若者たちはシンガポールが好きみたいです。それからバリ島も人気があると聞きます。透明な近代都市と熱帯の自然。両極に別れているのかも知れませんね。

### 都市人口増大の意味すること

池田 アジアの人たちを見ていますと、それぞれの国でいろいろと問題を抱えながらも、生きる活力が感じられますね。かえって日本の方が生きる力を感じられないところがありませんか。

山藤 確かにそう思います。アジアで感じる粘り強さというものが、日本ではあまり感じられません。これは都市ではないのですが、以前教育の問題を知るために、一人でベトナムの農村に行ったことがあります。学校を覗いても、鉛筆もほとんどないようなところですが。しかし、その農家のたたずまいや田園風景が日本と似ているのです。荒廃的な感じは全然しませんでした。こういうものが維持されている。これが大切なのではないでしょうか。

池田 生活に対する信頼感とでも言うんでしょうか。確かに歩んでいる、という人生に対する希望や確信があるんでしょうね。

山藤 しかし都市というのは、農村に住む若者から見れば、やはり憧れになりますでしょう。いわば本能的なものです。そういう人たちがどんどん都市に集まってきて、都市が膨れ上がってくる、という状況がありますね。

池田 中国では、今でも農村から都市への移動は禁止されていますでしょう。しか

し農村から農村への移動は数年前に認められて、それによって農村の工業化が進んだと言われています。しかしそれでも、二〇一〇年には、都市人口がさらに二億四〇〇〇万人も増えるという計算がありますものね。これは日本の人口の二倍ですよ。いったいどうなるのでしょうかね。

**山藤** 大都市への人口集中では、お隣の韓国でも問題化しているようです。バンコクではストリートチルドレン問題がありますし。マニラではスラム問題が解決していません。

**池田** 中国を考えますと、あの広大な地域を一括して統治することに、やはり無理が生じているような気がします。都市は都市で問題を解決するしかないんじゃないでしょうか。

**山藤** あの広さならそうなるでしょうね。とにかく大都市に行けば何とかなる、というところから、人が集まってくるのですが、その受け皿がないと、どうしてもスラムが発生しますでしょう。もともと農村で生きてきた人たちは、大家族の中で暮らしていたわけです。しかし、どの国でも都市では小さな家庭を作らざるを得ない。それを育てていくのは、地域の文化ではないかという気がします。いかが

ですか。

池田 都市に人が集まってくるのは、基本的に仕事があるからでしょう。それを分散できれば、人口の集中という問題はなくなるでしょうけれど。しかしエネルギー消費を考えた場合、集中した方が一人あたりの効率は良くなるということも言えるのじゃないでしょうか。

山藤 ただアジアの場合、都市の周辺は農村地帯ですね。都市はそれに頼って生きているわけでしょう。しかし流通経路にしても整備されていない現状の中で、あまりに人が都市に集中してしまうと、都市が孤立してしまう恐れがあるのではないのでしょうか。

池田 そうですね。どうしても都市というのは自己完結できないものですからね。

山藤 ですから周辺にミニ都市と言いますか、いくつかに分散されてしまえば、全体としてのバランスがとれてくるのではないかと思えます。

池田 なるほど、そうかも知れません。ただ問題は都市と都市をつなぐネットワークが構築されないと、結局それぞれに孤立してしまって、それぞれの問題を抱え込んだままになってしまうのじゃないですか。ですから新しい都市を突然作っても、

うまくいかないような気がします。

山藤 農村や都市が、どうやって有機的につながっていけるか、ということでしょうか。歴史的に地域の中心であった都市が、吸引力を持ってまとめられていくことができればいいのでしょうか。

### 都市は面白い

池田 都市の抱える問題がいろいろとあって、とかく批判的に言われていますが、僕は年をとっても都市に住んでいたいですね。

山藤 ほう、都市に魅力を感じていらっしゃるんですね。

池田 ええ。やはり自由なイメージがあるでしょう。開放的でさまざまな人間が入り込んでいけるという。それとある程度の娯楽がある。

山藤 望めば孤立して生きていくこともできますし。

池田 そうです。

山藤 すると今後も、都市への人口流入が止まることはない。

池田 限界までくれば、それは止まってしまふでしょうけど、多くの都市ではまだそこまでいっていませんでしょう。一人ひとりの都市に住む人たちが、どんな夢を描いていくか、ということ、都市の姿が決まってくるものだと思います。

山藤 しかし現実にはユートピアは実現しませんね。もちろん一部には、夢を実現した人もいますでしょうけれども、平均的にはイリュージョンが続いているわけでしょう。そういった人たちがどんどん入ってくることになる、いつか都市が分裂してしまふ、というようなことになりませんか。

池田 それはないと思いますね。たとえば東京を考えてみれば、もう人口の流入は止まっています。拡散してきているわけです。それによって都市問題が自ずから解決される方向にあると言ってもいいような気がします。

山藤 それも政策的なものではなく、そこに住む人間がそれを選択していったということですね。

池田 そうです。人間の知恵はそれなりに逞しいものだと思いますよ。自分の生活にとって快適なものを求めて、どんどん動いていくものでしょう。

山藤 とすれば、アジアの都市も自分で決めていけば何とかなるだろうと。

池田 楽観的過ぎますかね(笑)。無政府的がいいと言っているのではなくて、強引に計画を立てても、人は思い通りに動かないものだ、僕は思うんです。論理的に言うのは難しいんですが、微妙に調和を見出していくものではないでしょうか。

山藤 DO IT YOURSELFですか(笑)。しかしそれでは、将来的な見通しが立たないのじゃないでしょうか。

池田 立ちませんね(笑)。しかし厳密に見通して、それを進めようとしたら、ひどく窮屈になるんじゃないやありませんか。混沌とした過程が面白いと言えば、現状からして語弊があるかも知れませんが、問題があるから面白いとも言えると思います。だからアジアが注目されているのじゃないですかね。

山藤 確かに第三者的に見れば、面白いとも言えるでしょうね。ただ都市集中があまりに進めば、環境や食料といった長期的な問題が生じてきますでしょう。

池田 特に今問題となっているのは、京都で会議があつた地球温暖化、つまりエネルギー問題でしょう。

山藤 私はガス会社の人間ですので、一応はその専門家となるのでしようが(笑)。この問題は国によって多少違ってくると思います。例えば中国は、先ほどの話にも

ありましたように広大ですから、とても一筋縄ではいかないですね。電線を張り巡らせるなどできない相談ですから、風力発電や太陽電池の利用など、地域の発電、それも自然エネルギーも含めていく方法を考えていく必要があるでしょうね。

池田 しかし中国は巨大な発電所の建設を始めましたね。

山藤 もちろんそれでも必要でしょう。ただ中国を例に挙げたのは、エネルギーロス  
の例を言いたかったわけです。どこにどんなエネルギーがあるのかから始めて、地域に最も適したエネルギー供給の方式を開発していけばいいと思います。一例ですが、動物の排泄物をエネルギーに変える技術もあるわけです。そして電力だけではなく、多様なエネルギー技術がありますから、地域特性を生かしていく、という理念が求められると考えています。

### 日本の貢献とは

池田 日本人は都市で豊かに暮らすという意味では、アジアのほかの国々の人たちが味わったことのないような快適さを味わってきたわけですね。しかしこれは、も

う二十一世紀には許されないことではあるのかも知れませんが。共存のためにはある程度貧しさも共にしていく覚悟があるんじゃないでしょうか。その中で、日本がアジアのために何ができるかを考えていく必要があると思います。

山藤 そのとおりです。しかし我慢できますでしょうか、日本人が（笑）。

池田 しなければいけないでしょうが、あんまり自信はないですね（笑）。ただね、阪神・淡路大震災のとき、これまでの暮らしを一斉に反省して、避難所で暮らす人たちに思いを馳せましたよね。ですから、絶対にできないはずはないんですけど、三年経った現在では、意識も薄れてしまっています。これが問題なんですね。

山藤 長続きできるかどうかですね。これには宗教的な意識のなさも関係しているように思いますが。

池田 そうですね。イスラムにはラマダンの教えがあつて、等しく飢餓を体験しなければならぬ。こういう共通理解が日本にはないですね。

山藤 日本人の場合、豊かさの基準が物に偏っているのじゃないでしょうか。速く動くものもいい、たくさんあるほうがいいというように。抑制することはマイナスだという意識がありますね。その意味では、アジアの精神世界から日本が学ぶこと

は多いように思えます。

池田 とにかく経済発展だけをめざしてきた社会ですから、そんな意識になるのも無理からぬことだとは思いますが。ただその結果、地域社会が崩れ、家族の絆が薄れ、人間と人間の間が疎遠になっていってしまった。その日本が膨大な額のODAをしている。それでいったい何をしようとしているのか、を考えていかねばならないでしょう。

山藤 我々が考えているより、アジアに対する日本の影響力は大きいのですね。

池田 ええ。ですから援助するときに、日本は日本社会をアジア全域に広めるインサーになるうとしてはいけないんです。物の豊かさだけを尊重する意識まで持ち出してはいけないと思うんです。

山藤 なるほど。実は大阪ガスでも、インドネシアなどから天然ガスを買っている関係から、何かお返しをしなければ、ということとで国際交流財団というのを作りました。規模は小さなものですが、LNG基地周辺の小中学校に教育器材を寄贈したり、奨学金を出したりしています。何しろ基地のあるところは、都市部からはるかに離れたところで、非常に貧しい地域ですから。

池田 それはいつごろからですか。

山藤 もう五、六年になります。

池田 それはいいことですね。

山藤 ところが奨学金の金額は、こちらが考えて出しますでしょう。現地の通貨にしてこの程度かな、というように。すると現地から、多すぎるという返事が返ってきたのですよ。

池田 多すぎる、ですか。感覚が違っていたわけですね。

山藤 そうです。子供にはそんなにたくさんの金はいらない。それよりもっと人数を増やしてくれ、というわけです。

池田 日本の十万円でも、現地にすれば大変な金額なのでしょうね。

山藤 ゴルフボール一個の金額で、生活していけるところなのです。そういった生活が現実にあるわけですね。そういうことを我々がどれだけわかっているかとなれば、心許ないですね。

池田 これだけ多くの日本人が海外に出ているのに、なかなか現地の状況は伝わってきませんものね。特に今おっしゃったような場所に行く日本人は、それこそ仕事

のための人だけですし。

山藤 そういったことを経験してきますと、本当に金だけ出してあげればいいのか、という気がしてきますね。もつと別の方法はないだろうか。

池田 金と物以外となれば、人間を送り込むというわけですか。

山藤 ええ。それも学校の先生はどうか、と思つてゐるのです。現在では子供の数が減つてきて、教師の新規採用もほとんどない状態でしょう。

池田 確かに教師を派遣すれば、現地の教育事情もわかりやすいし、実際に現地で教えることができれば、一石二鳥かも知れませんね。

山藤 その程度の資金はあると思つてゐるのです。一年間休職扱いにして、給与はそのまま支給する。ただしアジアの都会ではなく、地方に住んで学校を見てきていただく。そうすれば、現地に資するだけではなく、その先生が帰つてきてからの教育にも、大きなプラスになると思います。

池田 そうですね。特に若い先生たちが効果的でしょうね。それに、日本の若い先生たちには、そういう意欲はあると思つてゐますよ。日本の教育制度が、どうしてもすつきりしない、何か違う方法があるはずだ、と模索してゐる人は多いでしょうから。

山藤 それもボランティアではなく、ちゃんと給与は出るわけですから、アジアの理解のために多少時間はかかるかも知れませんが、意義のあることだと思えますね。

池田 即効性を考えては、人間の交流などできませんよ。CEL四十一号にも紹介しましたが、日本の高校の先生が全国の高校生、それもちょっと問題のあるような子供を集めて、毎年中国に行っているんです。それもあえて辺鄙なところへ、だいたい春休みに二、三週間行きます。すると結構ショックを受けて帰ってくるようです。

山藤 日本にはなかなかそういう場所は見つかりませんものね。お互いによく知ってしまっていて、何か平均的な国ですから。

池田 そうなんです。何しろ日本人なんて見たこともない人ばかりのところですからね、最初の一週間ぐらいは、わがままが出て、がたがたする。しかし一緒に見知らぬところを旅するわけですから、結局お互い助け合うしかないし、日本に勝手に帰ることもできない。しかも中国の人たちと交流しているうちに、自分はいつたい何なのだろうか、などと考え出して、どうしようもない現実がわかってくるんです。

ある意味で大人になるためのイニシエーション、通過儀礼の役割を果たしているようにですね。

山藤 それはいいことですね。中国でなくても、ミャンマーでもカンボジアでもいけそうじゃありませんか。

池田 こんな形で若い人たちがどんどん行ってくれば、日本は将来的にアジアに対して、豊かさも貧しさもわかった上で、新しい何かを築いていけそうな気がしません。

### 新しい分散型都市づくり

山藤 アジアの一員としての日本を考えると、都市で暮らしていくことの意味と言いますか、都市のシステムや経済、環境などについても、いろいろと役に立てるところがあるのじゃないでしょうか。

池田 役に立てるはずですよ。やはり最も早く都市生活の善悪を体験してきたのは、我々だと思います。ただね、日本の方式を押し付けてはいけませんね。都市は農村

を、時代を映す鏡として見ていかねば、大きな誤りを犯すと思うんです。その点でも日本とアジアは似通っていますから。

山藤 確かに都市への人口集中やスラム化の根元は農村にありますね。農業では一家が食べていけないから、誰かが都市へ出て稼がなければならぬ。一番稼ぐのが女の子ですね。望んだわけではないけれど、行かざるを得ないということはよく聞かれることです。それと先ほどの都市への憧れ。そういう人たちが都市がどんどん吸収していった、ついに身動きできなくなってしまう。すると農村も都市も崩壊の道を歩むことになるわけですが、何かいい方法はないものではないでしょうか。

池田 ですから、何かしようとする前に、その国なり地域なりの事情を、十分に知っておく必要があるんです。その空気とか気候、歴史を踏まえた上で、社会的システムを構築していかないと、根づくことは無理でしょう。

山藤 その意味ではインターネットなどの分散情報通信システムが役立ちそうですね。

池田 ええ。特にインターネットというのは、細かいポイントをたくさん作って、それぞれが網の目のようにつながっていきますから、フリーな情報が世界中を飛び

交います。ちょうど都市も、こんなふうに分極化していけば、ある都市に物や人が集中することを防げるんでしょうけれど。

**山藤** 今までは都市に行かなければ、場所によっては電話も使えないこともありました。しかし衛星通信の発達で、全く離れたところにポツンとあっても、それが世界とつながることができますね。まさに中国のように広大な土地では、うってつけのシステムです。この情報システムのあるところが一つの拠点を作って、そこに都市が誕生していく、新しい都市を作っていく核になるようにも思えます。

**池田** そうですね、なればいいんですけど、決定的なものになるかどうかは疑問じゃないですか。決定的な情報とは、やはり人間同士が顔を合わせて、表情を読み取って多面的に判断できるものではないでしょうか。

**山藤** そして人間が生活する基盤であるビジネスを育てていけばいいわけですね。それもその国自体、あるいは支援しようとする国が意図的に地方に植え付けていて、情報をそこから直接外部に流していけば、新しい都市の基盤を固める上で、大いに役立ちそうですね。

**池田** しかも崩壊に至る道筋は見えているわけですから、人間が楽しく暮らしてい

ける都市の建設が可能になります。

山藤　すると日本の経験が生かされてきますね。アジアではまだまだ農村が多いですから、都市を作るにしても、その周辺で自給自足できる体制を作り、情報ネットワークでつなぐことができれば、今までにない新しい都市形態が生み出される可能性が出てきそうです。

池田　そうですね。ただ高層ビルを建てれば都市になるという単純発想ではなく、アジアらしいみずからの歴史と経験を自己表現できる都市の誕生を願いたいですね。

山藤　新しい都市を作るには流通やエネルギーなど、解決されなければならぬ問題が多くありますし、現在の都市問題も解決には時間がかかりそうですが、住んでほっとするような、そして便利な都市がアジアでは作ることができそうです。しかも日本の経験を役立たせることもできそうですから、大いに期待したいものだと思います。今日は長時間ありがとうございました。

池田　いえいえ。雑駁な話で失礼いたしました。

山藤泰対談集

言葉の創造力／目次





山藤 泰 対談集

- やはり一番強いのはお母さんです……………劉 香織 7
- 春は非常に好きでしてん。歳とともに秋が……………榊 莫山 31
- 日本を代表するものを持って帰るなら茶筌一本……………ジョン・マギー・宗悠 63
- 衣食住の材料全てが土を母体として……………佐藤嘉一郎 99
- 自然は私たちの営みを映しだす鏡……………石丸 晶子 127
- アジアの交流を文芸の分野でも……………尾崎 秀樹 155
- 国境を越えた、文化と心のきずなを求めて……………伊藤 栄子 191



アジアを知ることは日本を見つめ直すこと	若一	光司	217	
上海、芸術の新しい波世界の交流へ	李	向陽	253	
アジアの風とエネルギー	牛山	泉	275	
アジアの中の韓国と日本	筒井真樹子		299	
大衆文化現象の果てにインドネシアを見る	松野	明久	325	
アジアと日本、都市に住むことの未来は	池田	知隆	347	
アジアの精神世界と交易	村井	吉敬	369	
	ホスト	山藤	泰	

対談者の肩書きは対談時のものです。

山藤 泰 対談集  
言葉の創造力

初版 第1刷 1998年5月1日

RESEARCH INSTITUTE FOR  
CULTURE ENERGY AND LIFE  
OSAKA GAS CO.,LTD. COPYRIGHT ©1998

PRINTED IN JAPAN

定価2400円(税別)

著 者 ● 山 藤 泰

発 行 人 ● 久保岡宣子  
発 行 所 ● 株式会社JDC

日本デザインクリエイターズカンパニー  
〒552-0001 大阪市港区波除6丁目5番5号  
電話 06-581-2651  
〒107-0052 東京都港区赤坂5丁目2番40号  
電話 03-3224-9108

編 集 ● 大阪ガスエネルギー文化研究所  
CEL編集室

電話 06-581-2527

写 植 ● 彩夏堂  
印刷・製本 ● 天理時報社

ISBN4-89008-232-8 C0095